

島根県大田市立花横穴墓出土の頭椎大刀に関する考察

松 尾 充 晶

1. はじめに

昭和22（1947）年、島根県大田市の山林開墾中に古墳時代の横穴墓が発見され、金銅装頭椎大刀が出土した。この大刀は事情により長らく、その存在を伏せたまま博物館施設で保管されていたが、発見から73年経った令和2年10月に島根県へ寄贈され、展示や調査研究に広く公開活用できることになった。本稿は、立花横穴墓と称されるこの遺跡と、ここから出土した金銅装頭椎大刀に関して事実報告し、その評価や被葬者像、さらには歴史的背景について若干の考察をおこなうものである。本稿の内容は島根県古代文化センターがおこなう考古基礎資料調査研究（14県連携共同調査研究「古墳時代の刀剣類」）の成果であり、島根県立古代出雲歴史博物館の原田敏照氏、増田浩太氏、澤田正明氏、濱田恒志氏の協力を得た。

なお本稿をなすにあたり、大刀の所有者であった俵英氏とその御家族皆様には格別のご理解、ご協力とご助言をいただいた。温かいご厚情に対して深甚なる謝意を表し、厚く御礼申し上げたい。

2. 遺跡の概要とこれまでの経緯

（1）遺跡の位置

立花横穴墓は石見地域の東端（図1）、島根県大田市大田町大田口1564-1に所在する。三瓶山に流れを発し西流する三瓶川と、その支流である牛尻川に挟まれた丘陵の先端部、標高約45mの地点に立地している（図2）。大田市中心市街の東南側にあたり、日本海からは5.6kmの距離がある。遺跡名は当該の地名（立花）にちなむが、そのうち横穴墓が所在する丘陵は字名が山王であることから、「山王横穴」と称されたこともある。

この横穴墓は三瓶山北麓に広がる花崗岩帯の先端、風化が進んだいわゆる真砂土に掘削されている。こうした花崗岩や、横穴墓の掘削に適した凝灰岩は本遺跡より下流（北西）側には分布していないため、大田市市街地周辺（第2図の範囲）には横穴墓の集中がみられない。加土古墳、城山古墳といった横穴式石室墳が少数知られているのみである。



図1 遺跡の位置

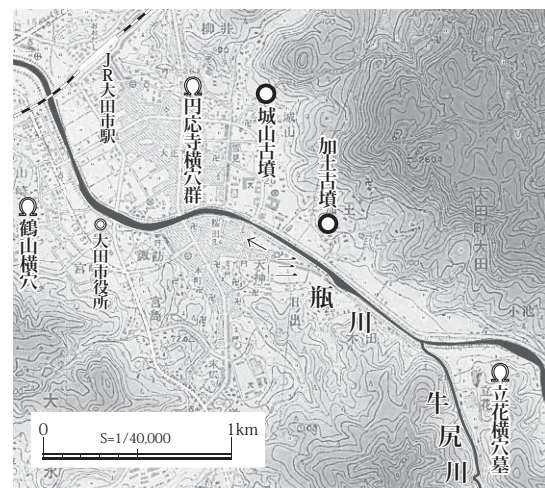


図2 三瓶川と周辺の遺跡

(2) 遺跡発見時とその後の経緯

発見時の状況 立花横穴墓が発見されたのは、昭和22年8月12日のことであった⁽¹⁾。その経緯は①昭和25年1月に作成された遺跡カードと、②昭和25年2月11日に山本清氏（当時、島根師範学校教授）が土地所有者・発見者である俵健一氏から聞き取りをした記録から知ることができる⁽²⁾。②山本氏の記録には

「立地：丘陵突出部の中腹、比高約15m」

「内部構造：土に掘りたる横穴」

「出土状況：地ならし等のため土が充満していたのを掘った（天井はなかりしならん）所、副葬品を発見したという。」とある。

聞き取りに基づいて山本氏が作図した「出土状況説明図」（図3）からは、縦長方形プランの玄室中央あたりから頭椎大刀・「枕様の石」・土器類がまとまって見つかったこと、大刀には「平石」が上にかぶさっていたこと、などが読み取れる。位置関係からみて、石枕に横たわる被葬者の体側に沿って頭椎大刀が副葬されている状況が想定されているようだが、山本氏はその事について特に触れていない。

出土遺物 昭和25年に聞き取りをおこなった山本清氏の記録には「出土品：金銅装頭椎大刀一口。金環一ヶ。水晶切子玉一ヶ。祝部蓋坏若干。糸底付盃。甕破片。」とあるが、現在伝わっているのは頭椎大刀1振のみで、それ以外の資料はすべて所在不明となっている。『おおだ』（大田町誌：昭和36年）に掲載された集合写真から須恵器の器種が判別でき、本来の出土品内訳は（表1）のとおりである⁽³⁾。また須恵器に関しては山本清氏の実測図（図4）から小型の甕口縁部（口径18.2cm）、坏H身（口径12cm）、小型の坏G（口径8.5cm）であったことが読み取れる。

頭椎大刀の保管に関する経緯 立花横穴墓から出土した金銅装頭椎大刀は一定期間、大田高校で保管されていた⁽⁴⁾。そして昭和35年頃、島根県立博物館（島根県松江市、昭和34年開館）に移送され、その後ながらく同館で保管されることになった。この間の経緯には、やや複雑な事情がある。

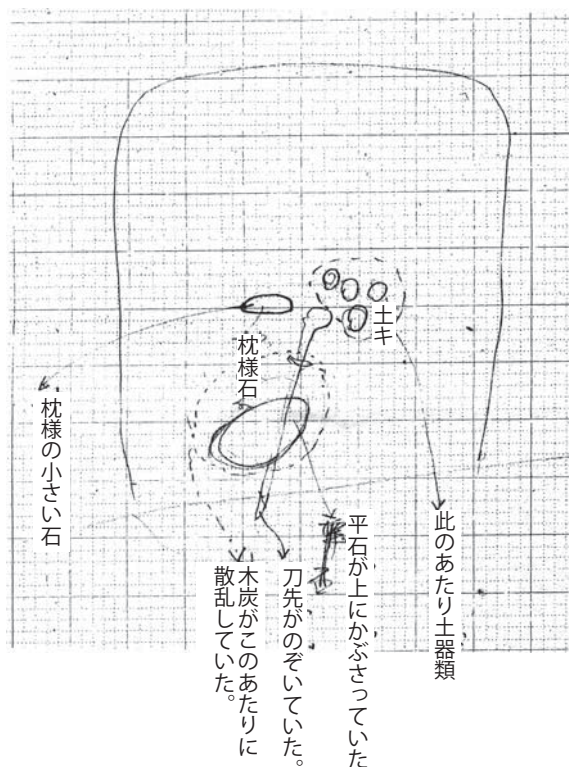


図3 山本清氏による聞き取り図
※手書き文字を活字に改変

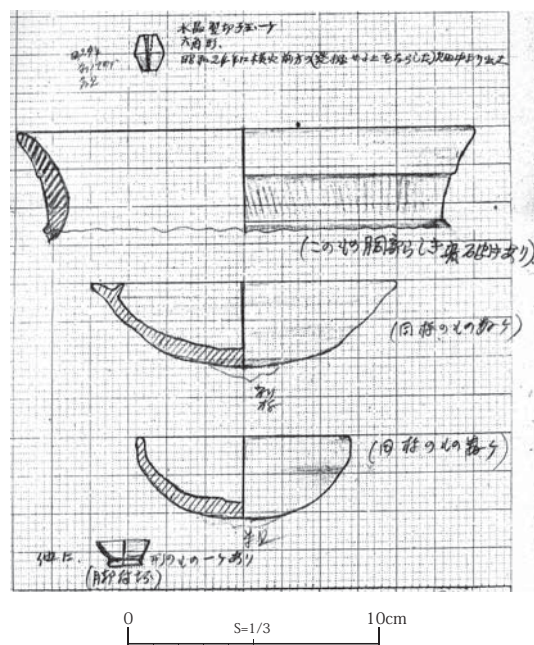


図4 山本清氏による須恵器実測図
※図を1/3に縮小

表1 立花横穴墓の出土品

品 名	数 量	昭和25年 山本清氏 調 査 時	現 状
金銅装頭椎大刀	1	○	○
耳環（金環）	1 ?	×「紛失」	×所在不明
須恵器 蓋坏	7	○	× ”
” 脚付坏	1	○	× ”
” 甕	破片複数	○	× ”
水晶切子玉	1	○	× ”

遺跡が発見された昭和22年時点の土地所有者・大刀所有者であった俵健一氏は平成5年7月に78歳で逝去された。以下は、そのご子息である俵英氏の御教示と、同氏から提供いただいた『毎日新聞石東情報』99号（1984年2月11日版）⁶⁾に基づく。

横穴墓発見の契機となった開墾作業に実際に従事していたのは、近隣在住の某氏であった。『石東情報』には俵健一氏の説明として以下の経緯を記している。“大刀は大田高校に保管されていたが、昭和35年頃に某氏が「たたりがあつては」と返却を申し入れ、某氏が元の古墳に埋め戻した”。俵氏は毎日新聞記者に対して「埋め戻した」と説明したようであるが、実際には埋め戻されてはいなかった。推測だが、発見に関わった某氏が遺跡現地への埋め戻しを強く主張したため、俵氏、大田高校、大田市教委等の関係者が出土品の保存管理に苦慮され、口裏を合わせて埋め戻したことにした、という経緯が想定される。そして緊急的な措置として、当時まだ開館間もない県立博物館に避難させたのであろう。県立博物館への受入れには島根県教委関係者が関わったと推察されるが、その際の経緯や移管に関する資料は残されていない。

その後昭和36年には、現地への埋め戻しを主張した某氏が病没するが、大刀は県立博物館に保管されたままとなった。同館では、受け入れた経緯を知る職員が誰もいなくなって以降も、「現地に埋め戻したことにしてある資料だから、存在自体を他言・公表してはならない」という注意事項だけが関係者に口伝・厳命・堅持されることになり、さらに平成19年の古代出雲歴史博物館開館にあわせ同館に移して保管されていた。一方、大刀の所有者であった俵健一氏はご家族に「大刀は、松江の学者・研究者が持ち帰ってしまった。預けたつもりだったが、その後、どうなったのか全く分からない。」と話し、亡くなるまで気に掛けておられたという。

昭和35年頃の県立博物館への移送は、危機に瀕した貴重な歴史資料、文化財を保存するために腐心された当時の関係者が選択した最善の手段であつただろう。しかしそのまま事情を詳しく知る人がいなくなり、60年余りの長きにわたってアンタッチャブルな状態だけが引き継がれ、結果的に死蔵され続けたことはたいへん不幸なことであり、何より所有者の意思に沿わないことであった。

重要資料でありながら、過去の詳しい経緯がわからないまま非公開で所蔵されている大刀に対して、島根県古代文化センターは島根県教育庁文化財課・古代出雲歴史博物館と協議のうえ、適切な形で活用が図れないか検討を進めた。過去に関わった関係者にご迷惑をおかけする懸念もあったことから、多方面の文化財行政OB等への聞き取り、相談を丁寧に慎重に進め、経緯の把握に努めた。そうして得られた情報を踏まえ、令和2年6月、俵健一氏から家財等一式の所有権を相続承継されたご子息、俵英氏とその御家族に面会し、大刀が古代出雲歴史博物館で保管されていることなどの説明と、それまでの経緯についてお詫びをする機会をもった。

俵氏と御家族は同年8月に古代出雲歴史博物館に来館され、大刀を実見した上でその扱いを検討された。結果、「重要な歴史資料として、今後は博物館で多くの方に見てもらうなど広く活用して欲しい」と、島根県に対して

寄贈する意思を示された。そして同年10月には正式に受贈の手続きが完了し、以降は古代出雲歴史博物館の常設展示などで展示、公開されることになった。今後は公有の文化財、県民の宝として、未来永劫、大切に継承されるものである。長年にわたる不義理にも関わらずお詫びと説明を温かく受け容れ、さらに県への寄贈という英断をなされた俵英氏と御家族の高邁なお志は高く賞賛、顕彰されるべきものである。このことは、なんとかしたいという一念のもと、手探りで出口を探し苦心した担当者にとっても、感激で胸が熱くなる経験であったことを付記させていただきたい。

(3) 遺跡の現況

横穴墓の現況 頭椎大刀が出土した横穴墓の位置は俵英氏が詳細に把握しており⁽⁶⁾、現在でも特定することができる。以下、俵氏のご案内により現地を実見した所見を記す。

横穴墓は北に延びる丘陵の西側斜面に位置し、開口部を西の谷側に向けていた(図5)。本来は傾斜のきつい谷地形であるが、容易に掘れる真砂土土壌であることから、後世、大規模に開墾され地形改変が著しい。横穴墓の地点も大きく斜面を切り崩して土を谷側へ押し流しており、間口10m×奥行10mの平坦地(緩斜面地)が形成されている。ここは以前、畑として利用されていたが、現在では山林化している。

発見から2年半後に現地を訪れた山本清氏は横穴墓の略測図を残した(図6)。この図では、山際に玄室の奥壁・側壁の下部が残り、流入土で床面が埋まっているように表現されている。玄室床面が土中に保存されているようにも見える図だが、実際には玄室床面で副葬品が発見された後、地域住民等により周囲で広く「発掘」が行われたとのことである。山本清氏の踏査時に、仮に玄室奥壁の一部が残存していたとしても、発見後におこなわれた玄室部分の掘削は床面レベルより下まで及んだ可能性が高く、玄室のほとんどは削平され失われたとみられる。なお現在、現地には横穴墓の痕跡はまったく残されていない⁽⁷⁾。

横穴墓群の構成 現在「立花横穴墓」とは頭椎大刀が出土した穴を指しているが、実際にはこれを含め複数の穴が連なる横穴墓群であったとみられる。昭和25年の山本清氏による踏査記録には、「此の横穴の北方約4mに破壊せる横穴一つ。又南方6mに横穴(内部に径7~8寸位な石を積み側壁を設けたと思われるもの)一つあり。更にその南方に未発掘の横穴一つありと推定せらる」とメモされており、不確実なものを含め4穴あったことが読み取れる。また、立花横穴墓を最初に紹介した郷土史である『おおだ(大田町誌)』(昭和36年)では「墳穴は大小六箇数えられるが、数次の山崩れのためにその判定も困難である」、さらに『大田市誌 十五年の歩み』(昭和43年)では「六基以上存在したが、崖崩れのため埋没消滅した」とあって、本来は6穴以上からなる横穴墓群であったが、崖面の崩落により消滅したとみられる。この記述どおり、大刀出土横穴墓の北側は斜面が大きくえぐれた形になっており、崩落した土砂が緩傾斜となって畑に利用されていた。一方、大刀出土横穴墓の南方は比較的もとの地形を保っているようであるが、横穴墓の存在をうかがわせる痕跡を確認することはできなかった。

(4) 立花横穴墓に関する既往の研究

山本清氏の研究 昭和33年に、立花横穴墓の存在を世に知らしめたのは山本清氏である(当時、島根大学文学部助教授)。山本氏は初めて遺跡現地を踏査した昭和25年から7年後の昭和32年5月、あらためて大田高等学校で頭椎大刀を実測し、その翌年に論文「西山陰の横穴について」を発表した⁽⁸⁾。この論文は古墳時代後期に盛行する西山陰(島根県域)の横穴墓を初めて体系的に扱おうとするものであり、形態、石棺などの特殊施設、副葬品を総覧したうえで、横穴墓の年代、被葬者の地位などを論じている。山本氏はこの論文で、山陰のような横穴墓が濃密に分布する地域に「地方文化圏的なもの」を想定するなど、後の研究に大きな影響を与えた。立花横穴墓については、顕著な副葬品をもつ横穴墓として、金銀装飾付大刀が出土した他の5例⁽⁹⁾とともに提示されている。こうした優れた副葬品をもつ横穴墓が一定数あることから、山本氏は「少くとも律令制時代で云えば一

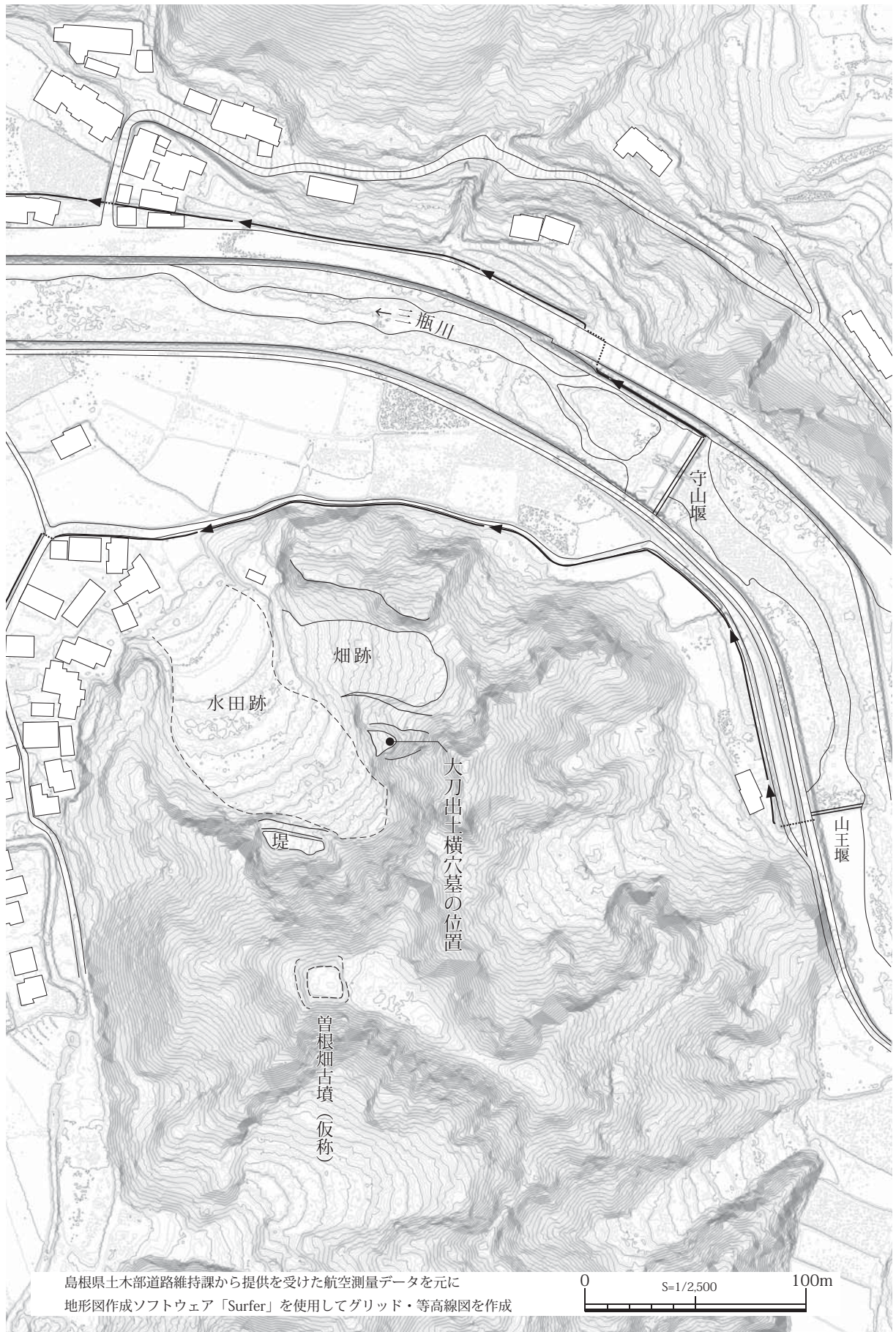


図5 立花横穴墓周辺の現況地形



1. 北西から



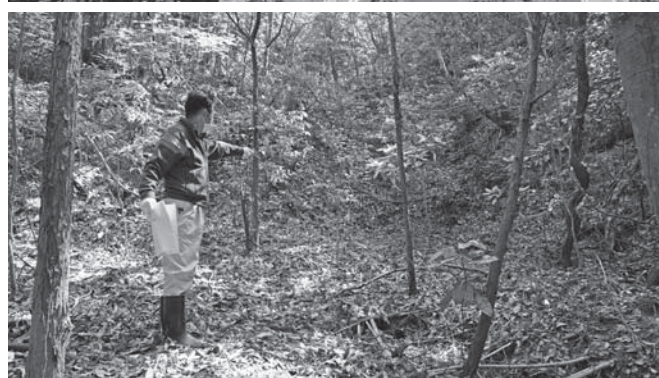
2. 西から



3. 南東から



4. 東から



5. 横穴墓現地の現状

写真図版 1 立花横穴墓・周辺の状況

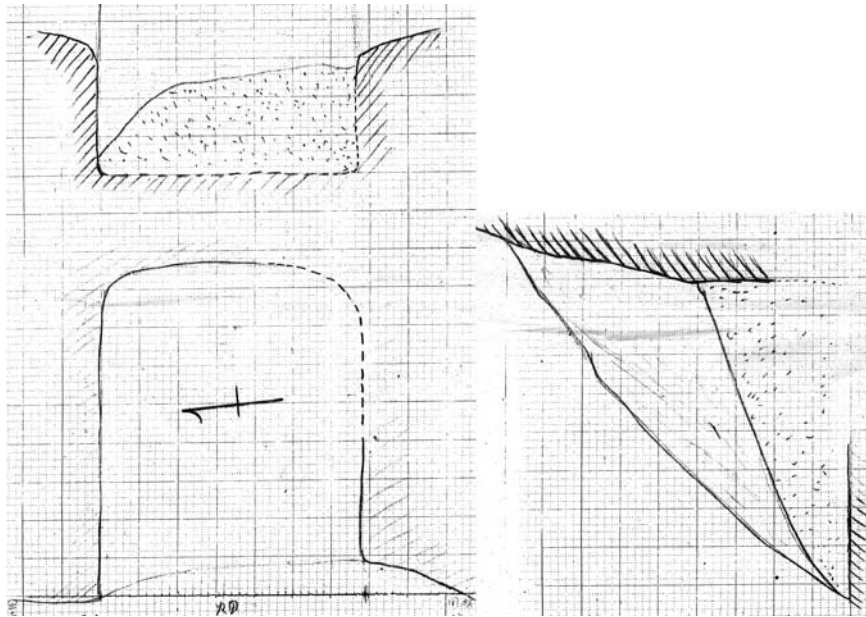


図6 山本清氏による横穴墓の遺構図

郷或はそれよりももう少し広い位な地域での支配的な地位にあったものの墓もその中に含まれている場合もあることは疑えないと思う」と述べ、横穴墓被葬者の中に階層が高い者が含まれており、墳丘をもつ横穴式石室墳の下位に一概には位置づけられないことを指摘した。立花横穴墓は、そうした横穴墓被葬者の地位や性格を物語る重要な事例として、研究史の初期から注目されてきたといえる。

その後の言及 前述のとおり、立花横穴墓の頭椎大刀は昭和35年頃、島根県立博物館に移送され、「現存しないもの」と扱われてきた経緯がある。したがってその後の郷土史等で簡単に触れたものはあるが、深く分析したものはない。言及したものを列記すれば、①「おおだ」（昭和36年）、②「大田市誌 15年のあゆみ」（昭和43年）、③『島根県大百科事典』（昭和57年）などで、①に大刀と須恵器の写真、②に大刀の写真が掲載されている。

頭椎大刀に関しては大谷晃二氏らが島根県内の装飾付大刀を集成する中で紹介しており、「山本清原図に加筆」として縮尺1/4の実測図を掲載している⁽¹⁰⁾。また近年では野島智実氏が大田市域の主要古墳を紹介する中に、縮尺1/6の実測図を掲載している⁽¹¹⁾。

3. 頭椎大刀の内容と位置づけ

（1）構造と特徴

概要 立花横穴墓から出土した金銅装頭椎大刀1振について、その構造・特徴を述べる。大刀は金銅板を打ち出した拳状・袋頭の柄頭をもつ「頭椎大刀」で、全ての装具は銅地に金装（おそらくアマルガム鍍金）した金銅製である。破損があるため推定値だが、刀身切先までの残存長が約95cm、欠失した鞘尻を含めると約100cmの大刀に復元される。

遺存状態 柄頭～鞘間金具については、若干の欠損・破断があるものの、ほぼ不足なく残存している。一方で鞘間金具～切先・鞘尻にかけては破損が大きく、鞘金具がまったく残っていないうえ、刀身は接合しない3片に破断している。山本清氏の聞き取りで「刀先がのぞいていた」とあること（図3）から大刀発見時の状況を想像するに、開墾作業によって刃先側から切り崩すような形で掘削が進んだと推定される。鞘尻側については、発見のきっかけとなった掘削で破損した可能性が高い。

なお後年、発見時の様子を語った俵健一氏によれば「発見時は金色の素晴らしい輝きの刀だった。しかし、日々

酸化がひどく赤さびて行ったのを憶えている」とのことである⁽¹²⁾。土砂に覆われ酸欠・還元状態で保存されていたものか。ただ、現状を昭和32年の山本清氏による実測図、昭和36年刊行の『おおだ（大田町誌）』に掲載された写真と比較しても、ほとんど相違が無く、それほど変化していないことがうかがえる。大刀の記録が残る昭和32年以降は、銹化・劣化は進行せず安定した状態だったとみてよい。

柄頭 2本（2周）の横畦目を打ち出した金銅板（厚さ0.9mm）2枚を表裏で合わせる。長径74×短径58×厚さ54mm。接合面は平滑で、接着に関わる痕跡を残さない。佩裏側の内面は、充填された革類とみられる付着物が表面を覆う（写真図版4-2）。この付着物は佩表側の内面にはみられず、鍍金されない銅地が露出する。また柄木・柄頭の芯に由来するような木質や、充填された布等の痕跡は無い。鳩目金具は径7mmの円筒で、折った端部を「の」の字形に下へ巻き込む。鳩目金具の筒部（脚）は破断しており長さ不明。

切羽 金銅製の、いわゆる「柄頭の切羽」で、倒卵形の金銅板からなる。長径45×短径29mm、厚さ1.8~2.0mm。内側に長径27×短径14mmの孔部を設ける。環の外周にあたる縁側面も鍍金されるが、内周の縁側面は鍍金が見えない。柄頭・柄間との接合に関わる痕跡は認められない。

柄間 柄間と、これに接する切羽側の金銅製縁金具は固着している。

柄間は緩やかに屈曲する形状で、幅31~35mm。柄木を金銅板で包み、刃側で接着する（蠟付けか）。タガネ打ち列点で表現された柄間金具の施文は、配置の規則性が崩れ気味で、やや場当たりの打たれた印象をもつ。佩表面はS字形の蕨手文5段を配し、隙間を「の」字形蕨手文で埋める。佩裏面は破損のため不明瞭ながら佩表とは文様の配置原理が異なるようだ。円形文から四方に「の」の字形蕨手文を伸ばしたものを基本単位とするようだが不詳。刃側と背側には2列の波状文を配す。なお鉄製目釘は表裏両面に露出しており、これを取り込むようにタガネ打ち列点文が配置されている。

鐔側の縁金具は楕円形環状で、断面形ハの字にテーパーが付く。現状で遊離している上、環の内側に別の金銅板が付着していてやや不審な点もあるが、内径からみて他の部位と考えられないことから図上で復元的に示した。

鐔 倒卵形の金銅製大型板鐔で、四辺形透かしを6窓開ける。地の部分が厚さ1.1mm、外周縁を断面T字形に肥厚させる。前述の縁金具と接する箇所には有機物らしい物が盛り上がるように付着している。

鍔 鞘が16mmほどズレた（抜けた）状態で固着しているために、本来は鞘口内部に収まっているはずの鍔が露出している。幅31mm、長さ20mm、厚さ18mm。金銅製で小口を堰板で塞ぐ。堰板は本体と一体的に成形されているようだが不詳。鞘木の端部がどこまで伸びていたか不明確だが、鍔まで及んでいなかったとみられる。

柄木 2枚合わせと想定されるが、鐔の位置で折れた破断面を見ても木質の状況はよく見えない。また樹種同定はおこなっていない。柄頭側の小口に露出した木質（写真図版4-3）は、突出する柄木と別の部材を組み合わせたと観察されることから、柄部と頭椎柄頭部が別材で組み合わせられていた可能性もあるが不詳。

鞘口 厚さ0.8mmの金銅板を筒状に成形したもので、接合（蠟付けか）ラインとみられる刃側で直線的に破断し、鉄部の銹化膨張により大きく口を開けた状態になっている。無文で長さ75mm。

佩用装置 貴金具と小環を一体にした単脚足金具を2点用いる、いわゆる横佩き2足佩用である。足金具の間隔は159mm（金具の心々）。鐔側のもの（一の足）で短径23mm、長径35mm、厚さ6mm。切先側のもの（二の足）は破断し銹びにより膨張している。小環の取り付け位置は2つとも佩裏側に偏る。

足間 佩裏側から金銅板（鞘巻）で巻き、佩表側に2列の円形浮文を打ち出した金銅板（伏板）を当て、4箇所の金銅鉾（鉾頭径約2mm）で鞘木に固定する。鞘巻にはタガネ打ち列点によりS字形の蕨手文が表されているようだが金銅板の大半は欠失しており不詳。露出した鞘木の表面も剥離していて文様痕跡は残らない。佩表の伏板は幅27mm、長さ154mmで両短辺は足金具の下に潜って固定されている。円形浮文を2列12段打ち出し、各浮文の周囲に二重の円形タガネ打ち列点文。長辺には平タガネを密に打って刻み目を入れる。縁（外）側に力が強く加わるため、タガネ痕は縁が広く楔形となっている（写真図版5-6）。

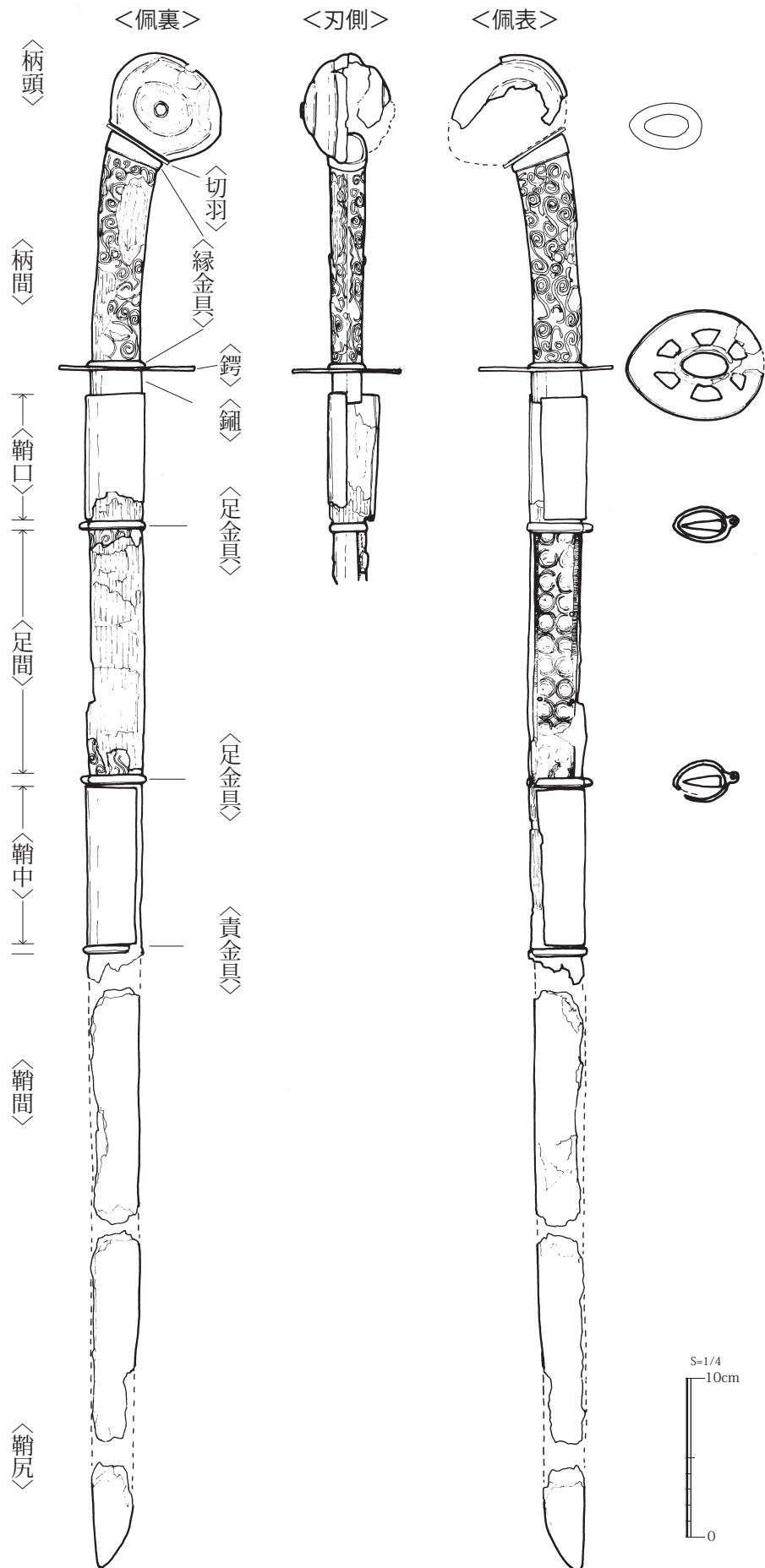


図7 立花横穴墓出土頭椎大刀（全体図）

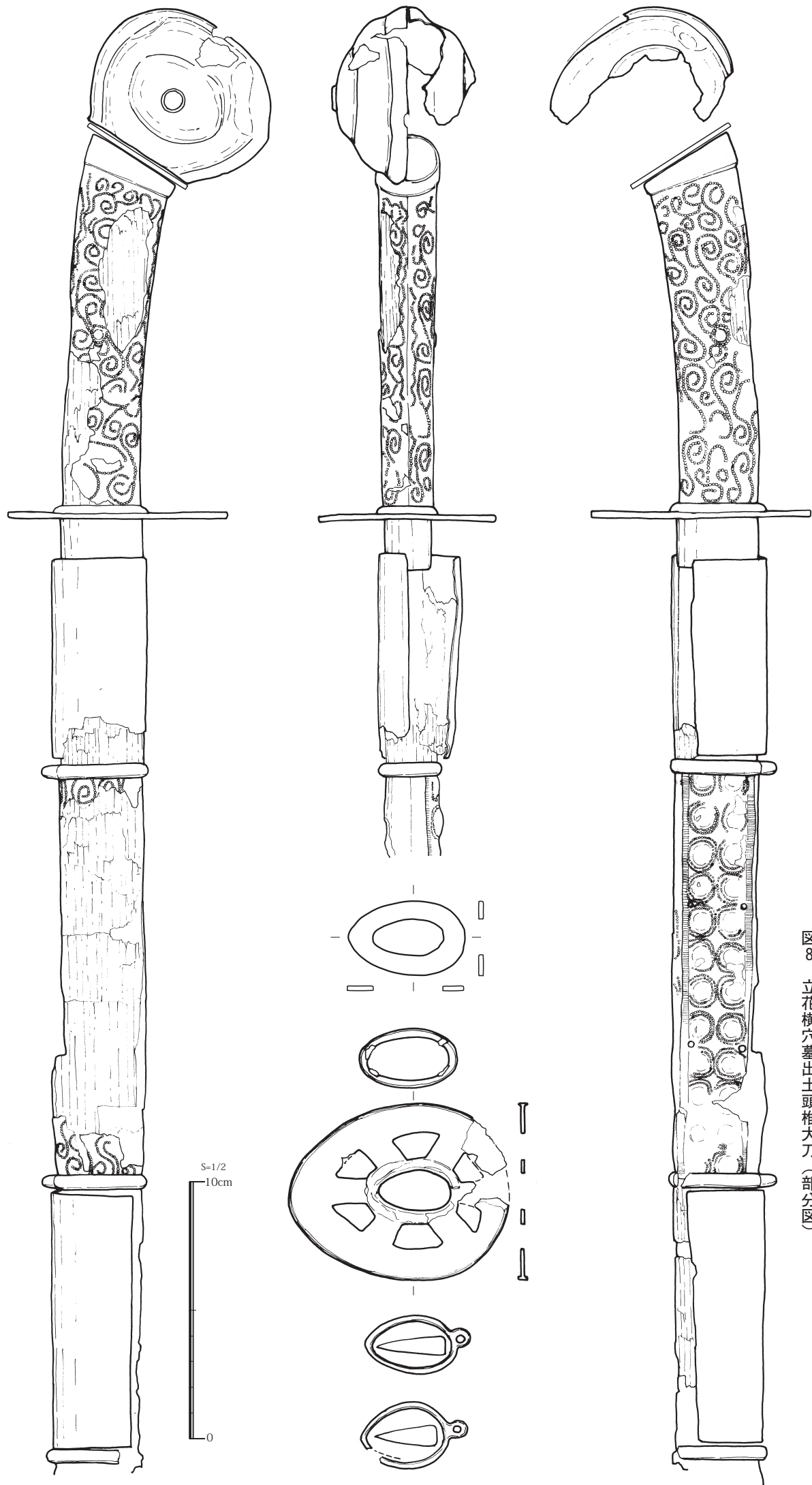


图 8 立花横穴墓出土頭椎大刀 (部分图)

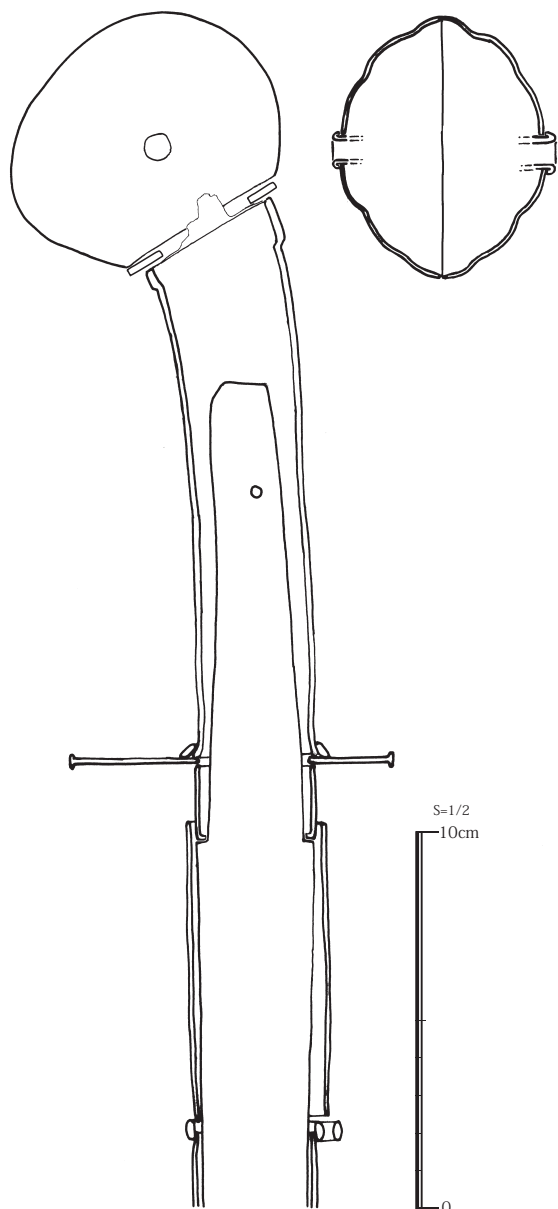


図9 立花横穴墓出土頭椎大刀（断面図）

鞘中 金銅板を筒状にしたもので無文。鞘口と同様に、接合（蟬付けか）ラインとみられる刃側で直線的に破断し、銹化膨張により口を開けている。長さ97mm、小口側は足金具（二の足）・貴金具と接するが、両小口ともに金具下には潜っていない。

鞘間 足間と同様の、金銅板による鞘巻+伏板であった可能性が高く、貴金具の下に潜った金銅板の端部破片がわずかに残る。佩表が2列の円形浮文、佩裏がタガネ打ち列点による蕨手文の可能性が高いが、金銅板、鞘木は全く残存しない。

鞘尻金具 おそらく鞘間金具の先に環状の貴金具をはさみ、さらに筒状無文の鞘尻金具が存在したと推定されるが全く残存しない。

鞘木 2枚合わせと想定されるが不詳。足間では佩裏側の金銅板が剥離して鞘木が露出しているが、鞘の構造などをうかがわせる箇所はない。樹種同定はおこなっていない。

刀身 鉄製の刀身は刃部が破損しており推定復元長75cm前後、反りは全くない。関は直線的な浅い両関で、関部での刃部幅31mm、茎幅25mm。茎長120mmで目釘孔は1箇所、鉄製目釘が孔内に残る。柄の形状にそって緩やかに曲線を描き、茎尻は直線的に切る。切先はわずかにフクラがつくが、カマス切先に分類できる。

（2）頭椎大刀の系譜

立花横穴墓から出土した金銅装頭椎大刀は一般に装飾付大刀と呼ばれる稀少な器財で、金銀装の馬具

や冠・飾履などと共に、古墳時代後期の限られた上位首長層のみが所有し墳墓に副葬するものである。ここでは立花横穴墓出土例の位置づけ、評価をおこなうための前提として、まず頭椎大刀の変遷過程を概観・整理する。

頭椎大刀の変遷過程 頭椎大刀は古墳時代後期、6世紀後葉～7世紀前半に盛行する装飾付大刀の一種で、全国で約90例の出土が知られている。装飾付大刀形式・意匠の多くが中国・朝鮮半島に由来するなかで、柄頭が拳状をした頭椎大刀は倭国特有のものであり、その名称は『日本書紀』にあらわれる語に由来する⁽¹³⁾。頭椎大刀は古墳時代の代表的な副葬品として早くから注目されており⁽¹⁴⁾以来、多くの研究が蓄積されてきた。

その編年については、畦目と呼ばれる柄頭の溝の差異（無畦・堅畦・横畦）が重視され、それに細かな属性分析を加味して分類されてきたが、近年では装具の特徴による総体的視点が示されている。鏢の断面形状・柄鞘装具に着目した橋本英将氏【橋本2014】が3段階に、鳩目金具の脚に着目した豊島直博氏【豊島2019】が5段階に変遷過程を整理している。また、装飾付大刀全体の製作技法を分析した大谷晃二氏【大谷2021】により、大刀工房の系譜についても言及されている。こうした近年の研究を踏まえて装飾付大刀の変遷を大略まとめると、図10のように示すことができ⁽¹⁵⁾、各段階の頭椎大刀の特徴は以下の点が指摘できる。



柄の X 線写真

柄頭の切羽 (左) と鐐 (右)

写真図版 2 立花横穴墓出土頭椎大刀



鍔・鞘口の X 線写真

写真図版 3 立花横穴墓出土頭椎大刀



1. 柄頭・鳩目金具の破断面



2. 柄頭（佩裏側）の内面付着物



3. 柄縁から突出する木質



4. 柄間（佩表）の列点文



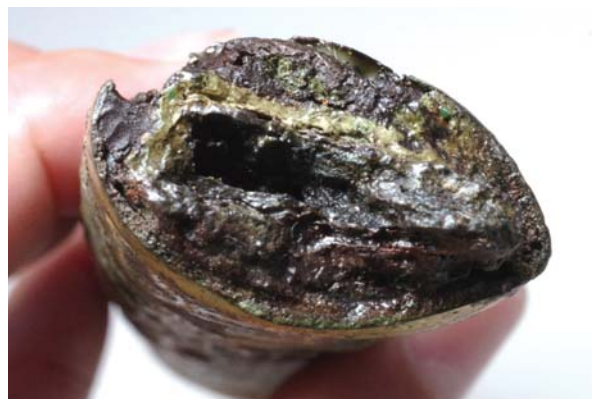
5. 柄間（佩表）S字形の蕨手文



6. 柄間のタガネ列点



7. 柄間（背側）の波状文



8. 柄の小口破断面（鏢側）



1. 鞘口と鍔



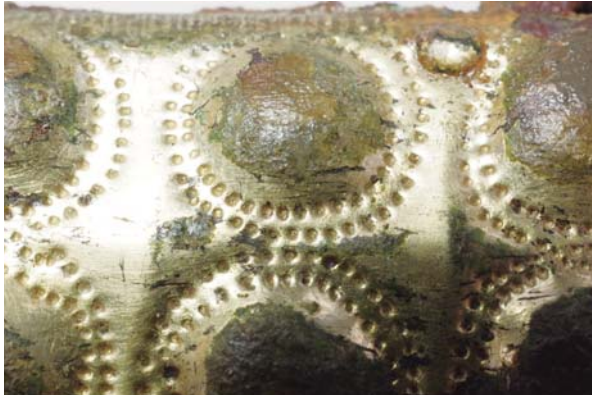
2. 鞘口と鍔



3. 鍔の小口（堰板でふさぐ）



4. 足金具（2の足）にもぐる足間の伏板



5. 足間伏板の円形浮文とタガネ円形文



6. 伏板縁のタガネ刻み



7. 破断した足金具（2の足）



8. 足金具（1の足）

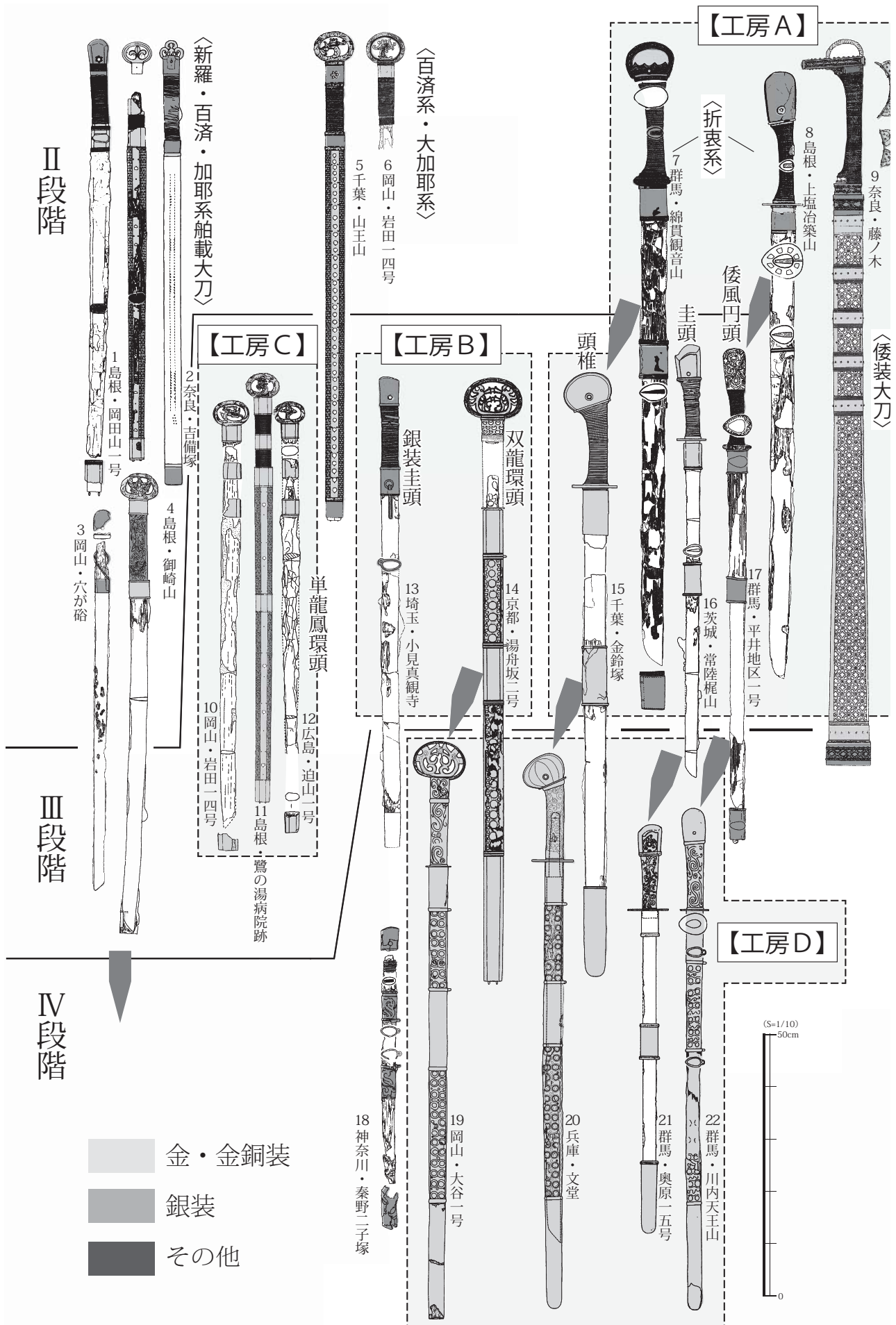


図10 装飾付大刀の段階と系統図

<Ⅰ段階：TK10型式期以前>頭椎大刀なし。

<Ⅱ段階：TK43型式期>倭装大刀を生産していた〔工房A〕で、在来の木彫金銀貼り技術に、外来系の鍛付けや鍍金技術を加えて（「折衷系」とも）、頭椎大刀が成立。

<Ⅲ段階：TK209（古）型式期>同工房で、上記系譜を引く倭風円頭大刀・頭椎大刀が生産される。この段階の頭椎大刀は、①鞘の一部に金銀装装具を施し（「準素鞘」）、②柄に銀・金銅線を巻き、③鐔の断面は厚みがあって平坦、という特徴がある。鳩目金具の脚は長い。

<Ⅳ段階：TK209（新）～TK217型式期>多種の大刀（双龍環頭・頭椎・圭頭・円頭など）が併存するが、〔工房A〕〔工房B〕が〔工房D〕に統合され、大刀形式間に外装（素材、技術）の差が無くなる。この段階の頭椎大刀は①鞘全体を金銅板で覆い、②柄は筒状の金銅板を被せ、③鐔の断面は薄く、縁が肥厚し「T」字形、という特徴がある。鳩目金具の脚は短い。タガネ打ち列点により柄と鞘佩裏面に蕨手文（例外もあり）、鞘佩表面に2列の円形浮文を打ち出した伏板（飾板）を鋳留めする、といった点は、この段階の双龍環頭など他形式と共通する。このように、頭椎大刀は6世紀後葉から7世紀前半にかけて盛行し、最終段階には全体が金銅装で「金ぴかの大刀」といった外観を呈するが、古墳時代の終焉にともない、7世紀中頃には急激に消滅することになる。

（3）立花横穴墓出土頭椎大刀の評価

類例との比較 上記の変遷過程と照らし合わせると、本例の特徴である鞘全体を金銅板（タガネ打ち2列円形浮文・蕨手文と無文筒金具）で覆い、柄にも筒状金銅板を被せるという構造・意匠は、装飾付大刀Ⅳ段階にみられる画一的手法であり、年代は7世紀第1四半期頃に位置づけられる。ここで、同段階の頭椎大刀のうち、類例（装具の全体像が把握できるものに限り）との比較を試み、表2・図11に掲げた。

これらはいずれも上記Ⅳ段階、頭椎大刀の最終段階に該当する資料であって、共通点が非常に多い。なにより装具全体の構成（鞘口・鞘中・鞘尻に無文筒金具を配する点／切羽・縁金具・足金具・貴金具の配置など）が完全に一致する点は大きな共通点である。各要素に注目すると、6窓の有窓鐔である点（無窓・8窓に後出する）、鐔断面形がT字形をする点（厚く平坦なものに後出する）、単脚足金具の2足佩用である点は全点に共通し、いずれも装具・金工技術の面で頭椎大刀の中ではもっとも新しい様相を示している。豊島直博氏が重視した鳩目金具の脚は不明なものが多いが、判明するものはいずれも後出する短脚（2.0cm未満）であり矛盾しない。

このように共通点の多い頭椎大刀群は、おそらく20年程度と想定される期間に連続集中的に生産されたとみられるが、一方では細かい点で差異も認められる。主な点を列記する。一般的に頭椎大刀の鞘尻は丸尻が多いが、①小見真観寺古墳例は平尻で先端に蟹目釘2点を打つ点が他と異なる。また全ての大刀は鞘佩表の伏板が2列円形浮文である点で共通するが、②浮文周囲の円形列点が1周と2周の両者があり、浮文各段の間を埋める列点は「○・の・～・（なし）」のバラエティがある。さらに柄と鞘佩裏は崩れた蕨手文を配すが、③伝小林古墳群例は菱形繫文であって原理が異なる。また蕨手文にしても、配置・単位・崩れ方など個体差が非常に大きく、同巧品と認められるものはない。さらに、大刀全体の法量のばらつきが大きく、最大で28cm近い差異がある。そして鞘金具の長さ、配置間隔もバラバラである（強いて言えば塚越14号横穴墓と文堂古墳に近い）。このような個体ごとの法量差は当時の大刀生産体制、つまり「連続的・集約的」といいながらも、規格性・統率性がそれほど高くない実態を反映したものであろう。極論すれば「出来た刀身に都度合わせて木製柄鞘を生産→それに合わせて金銅装具を生産」といったフレキシブルで随時即応的な製作工程が想定できる⁽¹⁶⁾。

また柄頭に溝状凹凸を設ける畦目については、類例として掲げたものの中に無畦・堅畦・横畦が混在する。以前の研究ではこの相違を前後関係として重視する見方が強かったが、近年では、初現時期に前後があるものの、最終的には3者が併存すると考えられており、Ⅳ段階の中での前後を示さない。ただし、畦目の数に関しては多條化していく傾向が指摘されていることから、塚越14号横穴墓（2.5条）、文堂古墳（3条）がやや後出する可能

表2 頭椎大刀類例との属性比較

	出土遺跡名	柄頭	鳩目の 脚長	全長 (復元値)	足間 浮文 段数	伏板 文様 構成	鐐 窓 数	鐐の 断面形	筒金具 の 合わせ
1	福島・伝下総塚船田古墳	無畦	?	—	12段	○○ ○○	6窓	T字形	?
2	千葉・八日市場市金原519	縦畦 2条	?	(81.5)	6段	◎◎ ◎ ◎◎	6窓	T字形	背側
3	群馬・伝小林古墳群	縦畦 2条	?	99.9	10段	○○ ○○	6窓	T字形	?
4	島根・立花横穴墓	横畦 2条	?	(100)	12段	◎◎ ◎◎	6窓	T字形	刃側
5	埼玉・小見真観寺古墳	横畦 2条	短脚	(110)	13段か	◎◎ ◎◎	6窓	T字形	?
6	東京・塚越14号横穴墓	縦畦 2.5条	?	(108)	8段	◎◎ ◎◎	6窓	T字形	?
7	兵庫・文堂古墳	縦畦 3条	短脚	105.7	8段	◎◎ の ◎◎	6窓	T字形	刃側か

性がある。

以上をまとめると、立花横穴墓の頭椎大刀は古墳時代の装飾付大刀が機能した最終段階にあたる7世紀第1四半期頃のもので、全体を金銅装した斉一性の高い装具をもつもの、といえる。

(4) 頭椎大刀の分布と被葬者

頭椎大刀の分布 頭椎大刀・双龍環頭大刀を全国的に網羅して分析した豊島直博氏は、その分布上の特徴を以下のように指摘する【豊島2019】。

[本稿Ⅲ段階 (豊島氏2・3期／6世紀後半)]

- ・頭椎大刀は関東、関東以北に多く分布し、近畿以西に少ない。
- ・双龍環頭大刀は東海以西に多い。両者の分布は排他的。

[本稿Ⅳ段階 (豊島氏4・5期／7世紀前半)]

- ・前段階の分布の偏りが解消し、両形式は全国的に広がる。
- ・両者の分布はともに、畿内～播磨～美作～出雲、畿内～但馬～因幡～出雲、東海～房総～上野、といった主要交通路に重なる。

石見地域の立花横穴墓に関しても、Ⅳ段階における頭椎大刀の中国地方への分布拡大、という広域傾向の中で理解しうる。そして隣接する出雲においても、Ⅲ段階の装飾付大刀副葬が大型の横穴式石室墳など上位首長に限られるのに対し、Ⅳ段階には横穴墓への副葬が増加し、大刀佩用者の階層・社会的地位が拡大することが知られており、立花横穴墓も同様の背景が想定される。

頭椎大刀と物部氏 Ⅳ段階に分布が西国へ拡大するとはいっても、頭椎大刀の分布が東海～上総～上野といった東国に濃密に分布することは明らかである。このような頭椎大刀の広域分布に物部氏の関与を想定したのは後藤守一氏が古く【後藤1936】、新納泉氏の研究【新納2001】にも継承されている。また近年では豊島直博氏が新

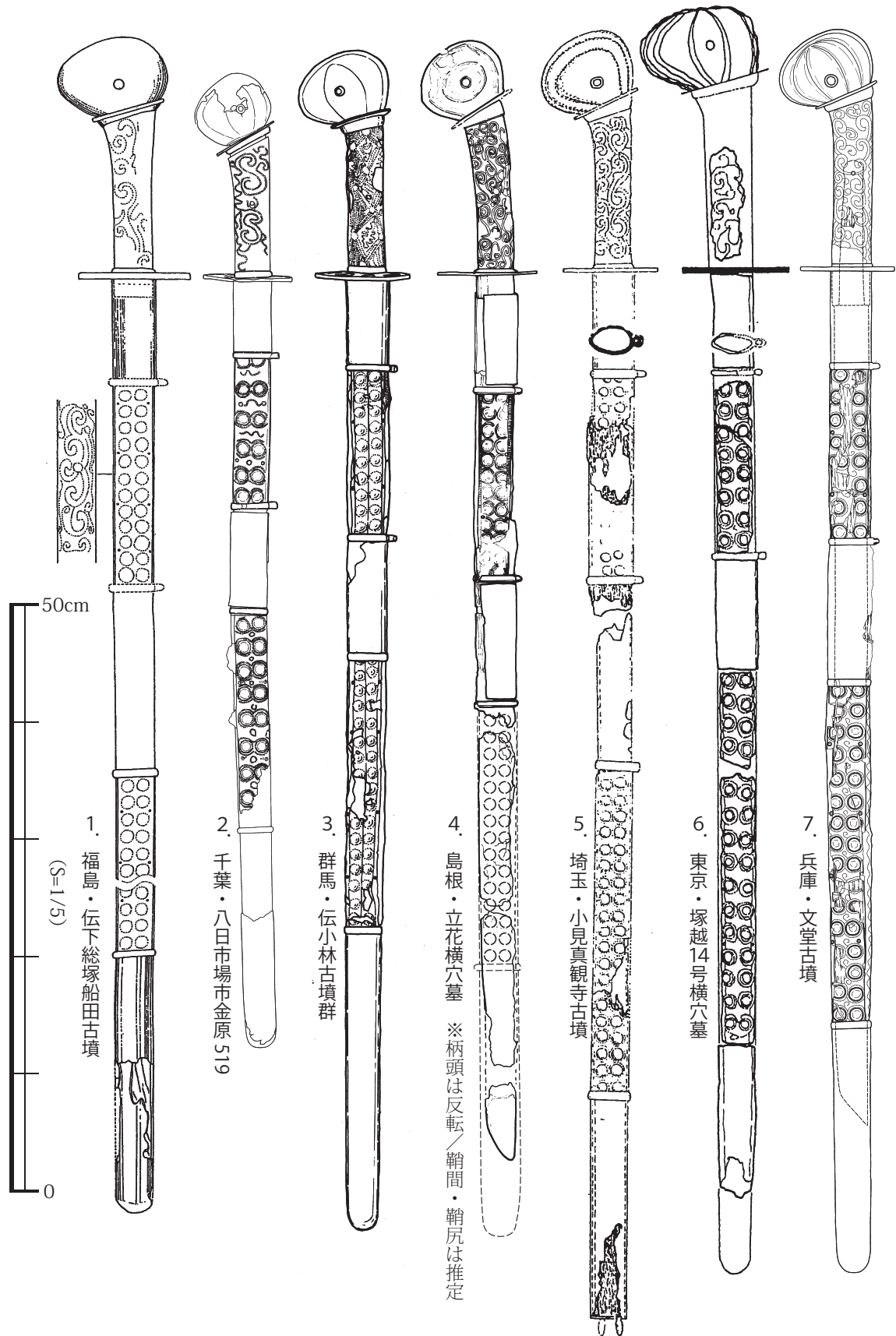


図11 頭椎大刀の類例

な根拠をあげながら、あらためて頭椎大刀の生産と流通に物部氏が関与したことを述べている。

本稿ではこうした装飾付大刀の生産・配与と氏族関係について深く立ち入らないが、以前の研究【平石・松尾編2005】では大谷晃二氏が提示した枠組み【大谷1999】に基づき、物部氏のような大伴造氏族の浮沈にともなうて、大刀生産工房が統合、再編されたことを想定した。具体的には、本稿でいうⅢ段階では「工房A」と「工房B」が併存するが、Ⅳ段階に「工房D」へ統合される。この現象が、587年に起こる物部本宗家滅亡事件と対応すると理解する。このように王権中枢での権力構造・動静と大刀生産がリンクする可能性は高いものの、具体氏族と大刀形式との対応関係を特定するのは難しい。筆者らは、「工房A」系大刀が多い出雲西部に物部関連氏族が濃厚に分布し、その影響が強いこと【平石2004】から、Ⅲ段階までの「工房A」の大刀生産に物部氏が深く関わったことを想定するが、研究上は物部氏が関与した大刀についても多様な見方がある。例えば上記のような頭椎大刀を想定するものから、「工房A」のいわゆる倭装大刀系譜のものを想定する見解、さらに「工房C」の規格化した単龍鳳環頭大刀に求める穴沢啄光氏らの説【穴沢・馬目1986】もある。前記のように金銀装頭椎大刀は偏在的分布を見せ、東海～東国に濃密に分布する一方で四国全域のように全く出土しない地域もある。山陰では伯耆で3点あるが、出雲では出土がなく、石見でも立花横穴墓のみで、島根県域でわずか1点、ということになる。頭椎大刀に物部氏との関係性が反映している可能性は考えられるが、物部氏の関係全てが頭椎大刀に集約的にあらわされているとは考えにくい。

石見国安濃郡と物部氏 上記のように大刀と古代氏族の関係は非常に複雑な様相であるが、大局的には、立花横穴墓の頭椎大刀は物部氏との関係が非常に深いと考える。以下では、立花横穴墓がある旧石見国安濃郡と物部氏の関係について考察する。

立花横穴墓から直線距離で約3kmの地点には饒速日尊を祭る延喜式内社、物部神社があり、この地と古代物部氏との関与を強く示唆する。その物部神社の社伝では「景行天皇の御代、物部竹子連が石見国造となり石見に来たが、その子孫が川合長田公と称して物部神社の司祭者になった」「竹子連十二世孫の道章は孝徳天皇の元年(645)改新の詔により食封を川合里に賜り、専ら物部神社祭祀の職を掌り安濃郡領を兼ねたという」とされる⁽¹⁷⁾。

こうした伝承がどのように形成されたか明らかではないが、その起点は饒速日尊を祖神とする物部氏の系譜を記した『先代旧事本紀』巻五「天孫本紀」であるとみられる⁽¹⁸⁾。同書では景行朝に「侍臣供奉」した人物として「物部竹古連公」がみえる。この「竹古連公」は『日本書紀』崇神期の出雲神宝檢校伝承に登場する物部氏の遠祖、物部十市根から一物部胆昨宿禰一物部竹古連公と連なる人物である。さらにその割注で「藤原恒見君 長田川合君 三川蘊連 等の祖」とあって、物部竹古連公一長田川合君という系譜が示される。

旧事紀における「長田川合君」と石見国安濃郡・物部神社とを直接結びつける資料は無いが、川合は物部神社鎮座地一帯の地名であることが特筆され、それが上記社伝の前提になったとみられる。なお、後には石見国造物部氏の裔とする金子氏とともに神主長田家があった。「天孫本紀」の長田川合君が物部氏に連なる氏族系譜をもつ石見国安濃郡の有力地方氏族であって、古代物部神社の祭祀を司っていた蓋然性は非常に高いと言えるだろう。その一方で、伝承にあるような物部氏と石見国造の関係性については具体的資料がない。『先代旧事本紀』「国造本紀」で石見国造は紀伊国造と同祖（神皇産靈命一天道根命）とされ、崇神朝に蔭佐奈朝命の子、大屋古命を国造に定めたとされる。この「蔭佐奈朝命・大屋古命」は他に見えず、物部氏との関係はうかがえない⁽¹⁹⁾。

石見国造と物部氏の関係は不明であって、石見国造に相当する古墳時代氏族の存否、さらに安濃郡との関係はいったん置くとしても、物部神社と物部氏との関係性は疑いない。別稿で触れたように、物部神社の立地は静間川下流域の段丘面を灌漑するための取水口にあたり、神社背後には始祖墓と位置づけられる古墳があることから、こうした水利灌漑・耕地開発、祭祀は古墳時代にさかのぼるものと推定される【松尾2019】。

こうした活動は物部竹古連公一長田川合君を地域的始祖と位置づけるような在地有力氏族が主宰したとみてよく、一般的にはそれが孝徳期を契機に、安濃郡最有力の郡領氏族となって物部神社の祭祀を管掌したという図式

が自然である。こうした地方物部氏の成立に関しては、伝承通りに地方に派遣された中央物部氏による部民編成も考えられなくはないが、やはり古墳時代の上番等を契機に物部氏統率下に置かれ擬制的に結ばれた物部一長田川合という関係が、地方物部氏として維持されるという一般的な構造の方が理解しやすい。

参考までに、物部神社から静間川を下ったところに鳥井という地名があるが、「十一代垂仁天皇二十三年初て鳥取部を定め玉ふ。是ハ鳥養御役なり、右の御方此所に御逗留有故、鳥居村と申すよし」という伝承⁽²⁰⁾があって、鳥取部との関係を語る。鳥取部の設定と分布が物部氏と密接に関わるという指摘もあり【平石2004】、物部神社周辺に留まらず周辺広域に物部関連氏族が分布していた可能性を考慮すると、ますます安濃郡域と物部氏の関係は濃くなっていく。立花横穴墓は物部神社が立地する静間川とは別の水系に作られているが、両水系は後の安濃郡に包摂される一体的社会であって、郡域で最有力氏族の構成員であった可能性が高い。こうした点からも、立花横穴墓の被葬者は6世紀末頃～7世紀初頭に王宮周辺へ上番して頭椎大刀を与えられた、地方物部・物部関連氏族の一員であったと考えられる。

4. 水利・耕地開発からみた遺跡の評価

冒頭で述べたように立花横穴墓の立地は、狭隘な山間部を流れ下る三瓶川が沖積地に向けて開口する喉元の地点にあたる。下流側1.5～2 kmには内容不詳な横穴式石室墳が点在するものの、付近には突出した首長墳系列もなく、金銅装大刀を副葬した本遺跡は前後の系譜も不明で唐突な印象がある。なぜここが墓域に選地されたのか、立花横穴墓の被葬者像を考察する本章では、古墳時代の水利・耕地開発、あるいは王権の関与や入植・渡来系集団の観点から検討してみたい。

(1) 「オオタ」地名起源

和名抄 まず着目するのは、遺跡が所在する地名「大田」である。現地名の島根県大田（おおだ）市大田町にある「大田」の初出が10世紀の『和名類聚抄』石見国安濃郡にみえる郷名であることは衆目の一致するところである。その表記は「邑陀」（高山寺本・東急本・元和古活字本）あるいは「邑陀」（名古屋博物館本）であるが、諸本とも訓を欠き、古代の郷名が「オオタ」「オオダ」いずれであったかや和名抄からは断定できない。しかし貞応2（1223）年3月『石見国田数注文』（益田家文書／鎌倉遺文3080）で「大たの郷 卅四丁二反三百歩」とあることを重視すれば、地名古訓は「オオタ」であった可能性が高いとみるべきであろう（後述する藤井宗雄も「た」と訓じている）。

「大田」起源の諸説 では、当地はなぜ「大田」と呼ばれるに至ったのか。幕末から大正にかけて説かれた重要な諸説を以下に示す。なおその後は現代に至るまで、下記の説を引用するにとどまり特に進展はない。

- ① 「山田で会う」逢田→会田→邑陀→大田（石田春律 八重葎⁽²¹⁾）
- ② 大嘗祭の神供になるべき稲田をいう／大炊寮が所管する諸国稲田を大飯田（おほいた）といい、これが大飯・飯田・大田となった。（藤井宗雄⁽²²⁾）
- ③ 屯倉で使役される太田部が置かれたため。（『島根縣史』⁽²³⁾）

「逢ふ」を起点と説く①は措くとして、和名抄の「邑陀」を「大田」の転化とし、「大田」表記が根源的・本質的なものとする点、それが朝廷の直接的関与により経営される水田に由来するとみる点は②③に共通する⁽²⁴⁾。

結論を急げば、本稿は③の見解、すなわち「太田部 之れ田部の一種にして若田部に対する朝廷直轄なる屯田に使役せる部民なり。」「和名抄に邑陀郷あり。之れ安濃郡中における尤も肥沃の平野にして穀物豊饒の地なれば太田部を置かるるに尤も恰適の地なり。」「太田部の存するより見れば此地方も亦屯倉の一なるか。」と極めて近い。③『島根縣史』を編んだ野津左馬之助が、太田部が置かれたと推定される全国の事例をあげながら、邑陀郷をその一つと述べた見解は、卓見というしかない。

大田と屯倉 石見国安濃郡に実際に太田部が分布したことを確認できないが、『島根縣史』が指摘するような

大田地名と屯倉（的な大規模水田経営）の関係性は妥当なものとする。こうした大田地名については近年、平石充氏が整理しており【平石2021】、古代の大田では渡来系集団を含む他地域からの入植が認められること、新たな用水の開削を伴うような大規模な水田開発が想定されることを述べた。具体例としては、『播磨国風土記』揖保郡条にみえる播磨国揖保郡大田里、摂津国三島賀美郡大田村、紀伊国名草郡大田村他があげられる。平石氏は「後に中世荘園に発展するような大きな水田、それまで地域社会の力だけでは営むことのできなかった「大田」がはじめて誕生したのであろう。このインパクトは大きく、それが地名として記憶されたのである。」とする。

大田の原型 ここで、古代の郷名となっている石見国安濃郡の「オオタ」がどの地域に由来するか検討する。現在の行政区分である大田市は、近世の大田北村+大田南村→大田村（明治8年）→大田町（明治36年）→大田市（昭和29年）という経過をたどる⁽²⁵⁾。近世には北村と南村が存在したが、中世以前は前に触れた貞応2（1223）年『石見国田数注文』（益田家文書／鎌倉遺文3080）に「大たの郷 卅四丁二反三百歩」「同ミナミの郷 十七丁三反百八十歩」とあって、北村の前身が「オオタ郷」であったことがわかる。これを整理すると、

・オオタ郷 → 大田北村

→ 大田村

・ミナミ郷 → 大田南村

となる。以上のことから根源的な大田とは、後の大田北村に相当する、三瓶川の北側（右岸側）を指すものであったと考えられる。このあたりは現在市街化しているが、本来は『島根縣史』が述べるように肥沃で広大な水田地帯であった。大正6年に山陰本線が開通し大田駅が新設されたことで多少の駅前街が形成されるものの、昭和40年代に大規模な市街化が進められるまでは広大な水田地帯であった。このことは昭和22年に米軍が撮影した航空写真（国土地理院USA-R514-4-84）からも確認できる。

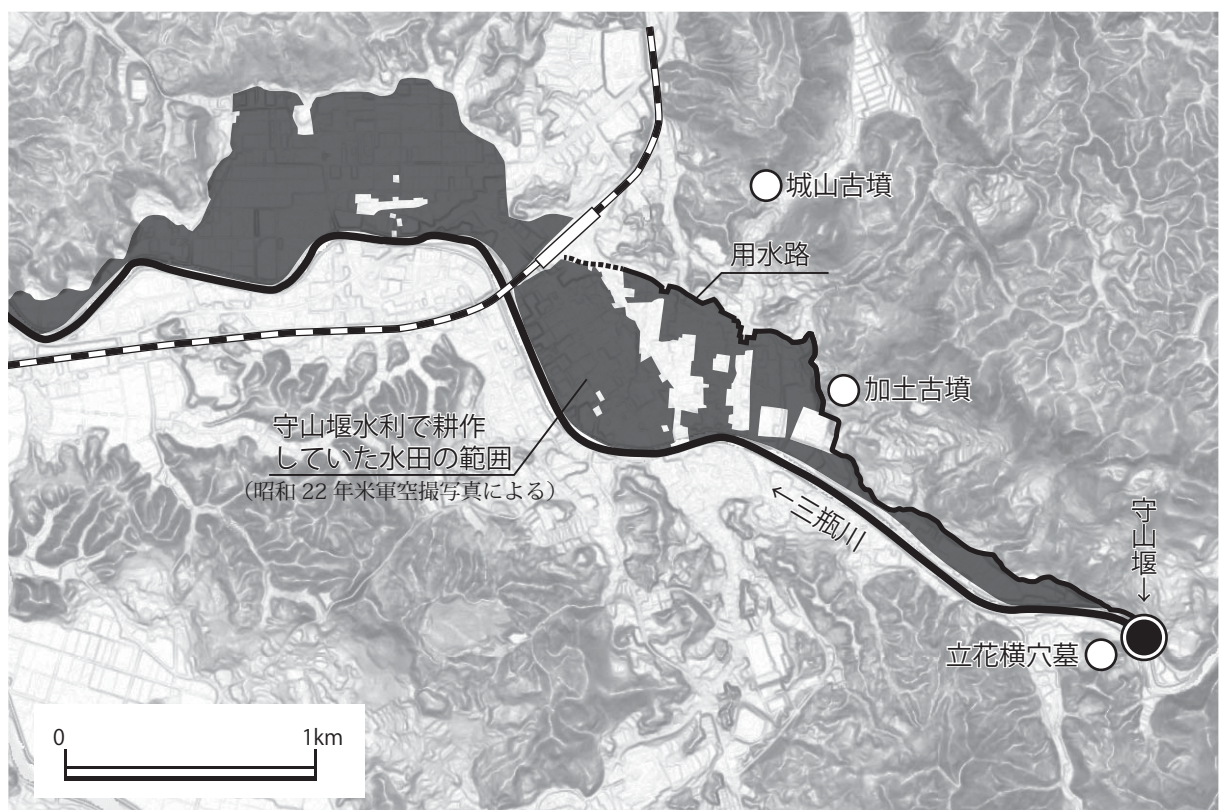


図12 守山堰と大田の水田域

(2) 立花横穴墓と守山堰の水利

大田を灌漑する守山堰水路 上記の広大な水田はすべて、三瓶川に水利水源を依拠している。下がった河床から導水することはできないため、かなり上流側に設けられた地点から取水する必要があると、そのための堰が「守山堰⁽²⁶⁾」である。現在の堰～用水路～水田耕地の関係は図12のような関係で、守山堰から発する水路ははるか4km先まで伸びていることがわかる。このように、広大な大田の耕作を可能にしたのが守山堰の設置と用水路の開削であった。

こうした大規模な土木工事がおこなわれた時期について、地域史研究者である松本一直氏は、当地に置かれた吉永藩（1643～1682年）の施策とみる⁽²⁷⁾。吉永藩によって大規模な河川改修・築堤・灌漑用水路の整備がおこなわれ、その結果が現状につながっていることは事実であろう。松本氏はこのような水利開発に吉永藩が初めて着



図13 安濃郡域の水利と古墳・横穴墓

手したとみるが、本稿はその点で異なる。大田地名の成立経緯からみても、その原型は古代以前、古墳時代に成立していたと考える。古代以前において、守山堰～大田域程度の灌漑開発は決して不可能なものではなく、同様に「大田」地名の残る紀伊国名草郡の宮井用水や播磨国揖保郡の赤井堰水路で確認できるうえ、東国上野の古墳時代における灌漑規模はこれよりはるかに広域で大規模である。

立花横穴墓の立地背景 ここであらためて立花横穴墓の立地をみると、上述の守山堰とわずか150mの至近距離にあることに気付く。松本一直氏によれば、守山堰付近の川底には打ち込まれた丸木杭の痕跡が残っており近代以前の守山堰の痕跡とみられるという。地形からみても、三瓶川から取水する守山堰と、現在はその150m上流に設けられている山王堰（三瓶川左岸を灌漑）の位置は歴史的にそれほど動いていないものと考えられる。

以上の点から立花横穴墓の立地は、大田の大規模水田耕作に不可欠な取水口（堰）付近であることに最大の意味があると考え。現状で全く手がかりはないが、周辺には首長居宅にあたるような居住域も存在していたことも想定される。また立花横穴墓のある丘陵最高所には、一辺24mの方墳状の高まりがあり（図5）、立花横穴墓に先行する首長墳の可能性も考えられよう⁽²⁸⁾。

このような古墳時代の首長（居館・墳墓）と水利開発の関係は、若狭徹氏が上野地域をフィールドにした研究【若狭2007】で明らかにしている他、近年では池淵俊一氏が出雲地域の意宇平野・出雲平野を扱って論じている【池淵2021】。これらの研究は5世紀代の土木治水、利水に渡来人が関与することを指摘しているが、石見国安濃郡の開発に関しても同様の背景が想定される⁽²⁹⁾。

（3）安濃郡の開発・屯倉と立花横穴墓

石見国安濃郡域では、古墳時代後期後半に人口急増とも言える現象が起こっていることを前稿でまとめた【松尾2019】。具体的には、波根湖南岸を中心に横穴墓が爆発的に造墓されること（6世紀後葉～7世紀前葉：TK43～TK217型式期）や、丘陵上に集落遺跡が一斉に展開する（TK43～TK209型式期）ことなどである。こういった現象は地域内で完結する漸次的発展では解釈できず、ある時に急激に人口が増加するイベント、すなわち入植や集団的移住が起こったことが推定される。

集落遺跡では、一般的に山陰の臨海部に定着しない造り付け竈をもつ住居跡が含まれており、居住様態の異なる集団が移動してきたことがうかがえる。平ノ前遺跡の出土品を分析した岩橋孝典氏は、北部九州（有明海沿岸）に由来する黒色処理須恵器模倣坏が流入していることを指摘しており【岩橋2019】、安濃郡への入植は広域に及ぶものであったとみられる。さらに、海上交通を介した人の動きだけでなく、三瓶山麓～中国山地を超えた瀬戸内側との交渉もあった。吉松大志氏は安濃郡・邑智郡佐波郷は瀬戸内地域の周防佐波との集団移動が想定されることを指摘した【吉松2019】。

こうした現象は政策的移住・入植といえるもので、大規模な水利灌漑施設の建設を伴う耕地開発が進められ、結果、生産量の飛躍的拡大を生んだことが想定される。安濃郡の人口増加は、古墳時代後期に守山堰（の前身）と用水路建設が企図され、三瓶川流域の耕地開発が進んだことと並行する現象と理解できよう。立花横穴墓の被葬者は、まさにそうした開発と水田経営を管掌する地域首長の一人であったと考えられる。このような拠点的生産地の開発は王権（・王権中枢にあった有力豪族）が地方に置くもので、その点で屯倉に相当するものとしてよい。菱田哲郎氏は屯倉に伴う入植と群集墳造墓が対応することを論じているが【菱田2019】、特に物部氏が関わる屯倉・古墳群事例（丹後与謝郡石川谷古墳群と物部神社・岐阜県本巣市船木山古墳群と物部系地名）が認められることを指摘されている点は注目される。安濃郡域に物部系氏族の関与が濃くうかがえることは前述のとおりであり、その関係が屯倉設置～大規模開発～大田地名の成立、の背景にあることが考えられる。

5. おわりに

以上本稿では、このたび島根県に寄贈された、県内唯一となる金銅装頭椎大刀を出土した立花横穴墓の事実関係を整理したうえで、その被葬者像として三瓶川下流域の大規模水田経営を担った人物を描いた。これは6世紀後葉頃に置かれた「屯倉」を管掌する地域首長であり、政策的入植により耕地が開発され生産力が急拡大する経過が「大田」という地名に刻まれていると想定した。安濃郡全体では、おそらく静間川流域の開発が先に展開しており（図14）、そうした活動を主導したのが物部神社に痕跡を残す物部系氏族とみられる。立花横穴墓被葬者はその有力構成員か、それとも入植を背景にした別系譜の氏族か検討の余地を残すが、前者の可能性が高いと考えた。結果的に、「物部氏と頭椎大刀」の関係性を示す有力な資料を提示することができたといえよう。

時 期	様 相	静間川流域	三瓶川流域
5 世紀中葉 後葉	土製模造品祭祀 新羅系陶質土器	★ （・行恒丘陵古墳群）	
6 世紀前葉 中葉	金銅製空玉	川合（物部神社） による開発・水田耕作 ・行恒古墳	（・曾根畑古墳？）
6 世紀後葉	集落・墳墓の急増	・浄賢寺古墳	★ 守山堰水利に よる入植的利発
7 世紀前葉			・立花横穴墓

図14 安濃郡域の開発過程と首長墳

【註】

- （1）昭和25年1月に作成された遺跡カードより。後述する毎日新聞石東情報には「昭和22年7月」とあり若干異なる。
- （2）①②ともに島根県へ寄贈された「山本清考古資料」中に保管されている。分類番号Y-3、No.1027。なお同資料の公開については<https://www.izm.ed.jp/cms/cms.php?mode=v&id=181>参照。
- （3）このうち耳環（金環）は昭和25年時点で既に紛失していた。また水晶切子玉は原位置ではなく、流土中から後日発見されたものである。山本清氏のメモには「金環出土せるも紛失せりと」「水晶製切子玉一ヶ、六角形、昭和24年に横穴前方の（発掘せる土をならした）畑中より出土」とある。
- （4）このことは、①山本清氏資料中に大田高校で昭和32年5月11日に作図した大刀実測図が含まれていること、②同氏の昭和33年論文「西山陰の横穴について」に「刀は今大田高等学校に保存されている」と記述されていることから確認できる。
- （5）岡田山1号墳の大刀銘文発見にからめて、36年前に地元でも装飾付大刀が出土したことを紹介する内容。
- （6）俵英氏は昭和21年生まれ、横穴墓の発見は昭和22年のため発見直後の記憶ではないが、昭和25年頃に山本清氏ら考古学・文化財関係者が注目し、大挙して自宅に來訪したことは記憶されているという。
- （7）畑にされた平坦地上面には雨水の流れが洗掘した凹みがあるが、横穴墓に関わるものではない。
- （8）山本清1958「西山陰の横穴について」『島根大学論集 人文科学』8巻、島根大学／文末に記された投稿時期は昭和32年11月。なおここでは遺跡名を「山王横穴墓」としている。文中には山本氏による大刀実測図が縮尺1/7で掲載されている。
- （9）同様の事例としてあげられたのは、鳥木横穴墓（安来市：銀装圭頭大刀）、鷲の湯病院跡横穴墓（安来市：単鳳環頭大刀ほか）、かわらけ谷横穴墓（安来市：双龍環頭大刀）、安田横穴墓（安来市：金銅装圭頭大刀）、長廻横穴墓（益田市：金銅飾

金具)

- (10) 大谷晃二・松尾充晶2004「島根県 裝飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧(改訂版)」『島根考古学会誌』第20・21集 合併号、島根考古学会
- (11) 大田市教育委員会2021『行恒古墳・城山古墳』大田市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
- (12) 前述の『毎日新聞石東情報』に記載がある。
- (13) 『日本書紀』神代下(第八段一書の第四・五)では、天孫降臨の際に大伴連の遠祖、天忍日命が「頭槌剣」を帯びて先導する。『紀』はこれを「頭槌、此を箇歩豆智(カブツチ)と云ふ」と訓註する。また、『紀』神武即位前紀戊午年十月条では、八十梟帥の残党と戦う天皇軍の大久米部が「頭椎剣」を持って戦う。ここでは「句鷲都都(クブツツ)」と訓じている。いずれも「コブ状のツチ(槌=ハンマー)」のような柄頭を指しており、現代の考古学上でいう古墳時代の袋頭大刀(頭椎・円頭・圭頭)を念頭に置いた名称と考えられる。
- (14) 初期の論文として、【高橋1911】【後藤1936】などがある。
- (15) 段階名称および工房仮称については、【大谷2021】に従った。また外装の素材については大谷晃二氏が作成した『金銀装大刀外装集』(2020年8月)を参考にした。大谷氏からは常に指導助言を得ており、本稿をなすにあたっては文献検索でご協力をいただいた。
- (16) 頭椎大刀には金銅装>鉄地銀象嵌>木製その他、という素材の差異で表現された階層が存在するという指摘【橋本2014】や、長さ260cmほどに復元される福岡県宮地嶽古墳例のような巨大な大刀が存在することを重視すれば、頭椎大刀のサイズに何らかの意味が表現されていることを否定はできない。しかしながらこうした法量の個体差は同段階の双龍環頭大刀でも認められる。双龍環頭は下位素材で作られたものが無く、階層を表現しないという理解に立てば、20cm前後の大刀の長短差に明確な秩序と言えるほどの意味は込められていなかったと考えたい。
- (17) 式内社研究会編1983『式内社調査報告』第21巻(山陰道4)
- (18) 『国史大系』第七巻、1966年、P.65／『神道体系』古典編八 先代旧事本紀、1980年、P.91
- (19) 栗田寛1903『国造本紀考』(『神道体系』古典編八 先代旧事本紀、1980年所収)は『和名抄』紀伊国名草郡に大屋郷があることを指摘し、ここから出た名であろうかとする。その点では石見国邇摩郡にある大家(おおよ)郷が注目されるが、こちらは「於保位倍(おほいへ)」と訓じられており判じがたい。
- (20) 文化14(1817)年、石田初右衛門春律による石見国地誌『石見八重葎』(石見地方未刊行資料刊行会1994『角郭経石見八重葎』)
- (21) 註(20)に同じ
- (22) 藤井宗雄 慶應元(1865)年『石見郡名考附郷名考』／『旧島根県史編纂資料 近世筆写編43』島根県立図書館蔵(筆写合本の表題は『石見国々郡郷考』)
- (23) 『島根縣史』第三編(復刻版第二巻) 国造政治時代／第十九章 石見に於ける屯田、1923年
- (24) 『島根縣史』の編纂にあたった野津左馬之助は資料収集の過程で藤井宗雄の著作にも接しており、②の見解を承知していたとみられる。
- (25) 『角川日本地名大辞典』32島根県、1979年、角川書店
- (26) 現在、地元では「森山堰」と表記する。後述する松本一直氏のご教示によれば、近世吉永藩が会津・守山から治水技師を呼び寄せて築堤・河川改修を行ったことに由来する地名であることから、本稿では「守山堰」の表記をとる。
- (27) 松本一直氏(出雲市知井宮町)からは吉永藩政における守山堰整備・三瓶川改修について詳細な御教示をたまわった。松本氏は、吉永藩が殖産事業として三瓶川・静間川の築堤を計画、会津・守山から治水技師を呼び寄せた結果、守山堰～灌漑用水路が完成したとする。
- (28) 地名をとって「曾根畑古墳」と仮称しておく。現状は整った方墳状を呈するが、畑作による改変を受けた結果であり注意を要する。段築や、葺石・埴輪・土器等の、古墳と認めうるものは認められなかった。なお、物部神社背後の山にある八百山古墳群は祭神宇摩志麻遲命が鎮まるとされる。現在でも祭祀対象とされる御神墓であり、これを始祖墓とする根源的信仰は古いものであろう。古墳自体は静間川水利の初期開発に関わった被葬者が想定される。このように、水利水源(堰・取水口)に隣接して管掌者の墳墓が造られる関係は、守山堰-曾根畑古墳・立花横穴墓も共通する可能性が高い。
- (29) 静間川の取水口に当たる物部神社には朝鮮半島由来の陶質土器高坏が伝わる。5世紀後葉の新羅系土器であり、奈良文化財研究所 松永悦枝氏の御教示によれば、昌寧地域で製作された可能性が高いものである。また静間川河口の港津にあたる平ノ前遺跡では新羅系装身具とみられる金銅製の歩揺付空玉が出土しており、活発な対外交渉の拠点であったことがうかがえる。

【引用・参考文献】

池淵俊一2021「水利開発と地域権力-5〜7世紀の出雲を素材として-『考古学研究』第68巻第3号(通巻271号)考古学研

研究会

- 岩橋孝典2019「古墳時代後期の炊爨文化からみた地域相－出雲西部地域と石見東部地域を事例として－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集、島根県古代文化センター
- 大谷晃二1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 大谷晃二2021「金銀装大刀と豪族」『太宰府史跡指定100年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第2集
- 後藤守一1936「頭椎大刀について（一）」『同（二）』『考古学雑誌』第26巻第8号・12号
- 高橋健自1911『鏡と剣と玉』合資会社富山房、国立国会図書館デジタルコレクションで公開
- 豊島直博2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第102巻第1号、日本考古学会
- 新納泉2001「空間分析からみた古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』第48巻第3号、考古学研究会
- 橋本英将2014「金銅装頭椎大刀の製作技術と佩用者像」『文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会
- 菱田哲郎2019「地域の開発と後期古墳－ブレ律令国家期の地域社会の形成－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集、島根県古代文化センター
- 平石充2004「出雲西部地域の権力構造と物部氏」『古代文化研究』第12号、島根県古代文化センター
- 平石充2021「大田」地名から古代の開発を考える」『播磨国風土記』の古代史』坂江渉監修、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室編
- 平石充・松尾充晶編2005『装飾付大刀と後期古墳－出雲・上野・東海地域の比較研究－』島根県古代文化センター
- 松尾充晶2019「古墳時代の開発と地域形成－石見国安濃郡域を素材に－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集、島根県古代文化センター
- 吉松大志2019「国家形成期の石見地域と地域間関係－佐波をてがかりに－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集、島根県古代文化センター
- 若狭徹2007『古墳時代の水利社会研究』学生社

【図10 実測図の出典】

1. 島根県教育委員会1987『出雲岡田山古墳』／
2. 奈良教育大学2006『吉備塚古墳の調査』／
3. 岡山県古代吉備文化財センター2008『八幡山遺跡ほか・穴が辻古墳』／
4. 島根県立八雲立つ風土記の丘1996『御崎山古墳の研究』／
5. 市原市教育委員会1980『上総山王山古墳発掘調査報告書』／
6. 金宇大2017『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版会／
7. 群馬県教育委員会1999『群馬県綿貫観音山古墳Ⅱ』／
8. 島根県古代文化センター1999『上塩冶築山古墳の研究』／
9. 奈良県立橿原考古学研究所1995『斑鳩藤ノ木古墳第2・3次調査報告書』／
10. 大谷晃二2020『金銀装大刀外装集』／
11. 大谷晃二・松尾充晶2004「島根県 装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧（改訂版）」『島根考古学会誌』第20・21集合併号／
12. 神辺町教育委員会1983『迫山第1号古墳発掘調査概報・御領遺跡発掘調査概報』／
13. 瀧瀬芳之1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会／
14. 久美浜町教育委員会1983『湯舟坂2号墳』／
15. 木更津市教育委員会2020『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』／
16. 大洋村教育委員会1981『常陸梶山古墳』／
17. 藤岡市教育委員会1993『平井地区1号古墳』／
18. 秦野市教育委員会2013『秦野の遺跡5 神奈川県指定史跡二子塚古墳』／
19. 北房町教育委員会1998『大谷1号墳』／
20. 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会2014『文堂古墳』／
21. 群馬県教育委員会1983『奥原古墳群』／
22. 瀧瀬芳之1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会

【図11実測図の出典】

- 〔伝下総船田古墳〕 穴沢啄光・馬目順一1977「頭椎大刀試論－福島県下出土例を中心にして」『福島考古』第18号、福島考古学会／
- 〔八日市場市金原519〕 財団法人千葉県史料研究財団編2002『千葉県史編さん資料 千葉県古墳時代関係資料 第1分冊』／
- 〔伝小林古墳群〕 山内紀嗣1990「天理参考館所蔵の金銅装頭椎大刀」『天理参考館報』第3号、天理大学附属天理参考館／
- 〔小見真観寺古墳〕 桜井達彦1987「頭椎大刀の編年に関する一考察」増田精一編『比較考古学試論』筑波大学創立十周年記念考古学論集、雄山閣／
- 〔塚越14号横穴墓〕 大田区教育委員会1994『考古学から見た大田区－横穴墓・古代・中世 資料編－』／
- 〔文堂古墳〕 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会2014『文堂古墳』